JAIST Repository
https://dspace.jaist.ac.jp/

Title	グローバルな場で考える日本のイノベーション
Author(s)	桑原，裕
Citation	年次学術大会講演要旨集，26: 842-846
Issue Date	2011-10-15
Type	Conference Paper
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/10247
Rights	本著作物は研究・技術計画学会の許可のもとに掲載するものです。This material is posted here with permission of the Japan Society for Science Policy and Research Management.
Description	一般講演要旨

JAIST
JAPAN
ADVANCED INSTITUTE OF
SCIENCE AND TECHNOLOGY

Japan Advanced Institute of Science and Technology

2I26

グローバルな場で考える日本のイノベーション

桑原　裕
株式会社 GVIN 代表取締役 CEO
兼オーストリアマイクロシステムズ・取締役
兼新経営研究会代表世話人

1　緒言

日本産業が近未来の技術に特化しすぎた弊害は、近年ぽつぽつと、あちこちその片鱗が見えるようになってきた。しかし、今回の東日本大震災で、これが、実にはっきり出てきたのである。例えば、日本が開発したロボットや計測器が今回の大震災には、大方役立たずだったのである。代わって、海外の軍事用のロボットや計測器が大活躍した。これは、実に由々しき問題であると言わざるを得ない。因みに、このロボットは、英国の QinetiQ 研究所の米国研究所が開発したロボットで、この中には、筆者が役員をしているオーストリアマイクロシステムズという、オーストリアのグラーツに本社がある会社のロータリーエンコーダーという部品が沢山使われている。

2　産業の将来と国家の将来

本来産業が狙う未来は、1 年から 15 年、国家が狙う未来は、近未来から 15 年、20

年、30 年、50 年、100 年であると言われている。近未来で産業と国家で狙いが重なるところはあるが、むしろ国家は、30 年、50 年、100 年の計をしっかり立ててこれに取り組んでもらいたい。産業も、今日～近未来の製品開発計画から、3～7 年の応用研究、7 年～15 年の基礎・基盤研究というポートフォリオをしっかり持って取り組んでいかないと、世界的な競争には勝てない。ましてや、既に、世界一の産業大国になった日本は、むしろ、応用研究や基礎・基盤研究にしっかり力を入れて、世界に先駆けたイノベーション創出を図らないと、世界が期待する日本から外れ、取り返しがつかない大失敗をする危険性が多々ある。学は、産業、政府のこうした短期、中期、長期の計画に対して、適切なコメントをし、また、その中身を最も明快に説明しなければならない。

３　日本企業の創業者たち：イノベーションをモットーにした

日本を代表する企業が、その創業時代に、イノベーションを非常に大切にし、現場を重視し、異文化との対話を大切にした教訓を忘れてはならない。例えば、ソニーの創業者の一人である井深大氏は、1 の成功製品には 10 の試作が必要で、10 の試作をするには 100 の研究開発のプロジェクトが必要であると説いた。また、イノベーションには異文化との対話が必要であることを説いた。この考えは、ソニーの中村末広氏の「ソニーは 1，10，100」に詳しく書かれている。本田宗一郎氏は、徹底した現場主義を貫き、イノベーションが現場からしか生まれないことを、肌で部下たちに教えた。そして実際に、世界をあっと言わせた数々の二輪車、四輪車を現場から創出した。この創業者精神が息づいているためであろうか、ホンダが、リーマンショックの時、研究開発費だけは減らさなかったのは、記憶に新しい。日立製作所の創業者・小平浪平氏は、中央研究所を設立した 1942 年（この年次は実に絶妙である。真珠湾攻撃の翌年である）に、「人生百に満たざるに、常に懐く千年の憂」と説いた。そして、常に世界を相手にすることを説いた。これら創業者達のイノベーションに対する執拗なまでのこだわりは、企業が、不況に陥った時、創業者の原点に戻って顧みられることが多かったが、これからは、これを恒に心に刻んで企業経営しなければならない、と筆者は思う。

小平浪平の書：長期的な視野に立った研究開発の大切さを説いた

今こそ、日本は、産官学が一致協力して、国を挙げて、この問題に真剣に取り組まなければならない。しかし、バブル崩壊後、疲弊した日本の産業は、これら先人の教えを守り切れていないのではなかろうか（例は 3 社についてのみであるが、考え方は、多くの会社に当てはまる）。特に、将来技術の研究開発に関しては、十分な投資をしていないのではないだろうか。また、取り組む課題がグローバル化してきているので、課題があるからと言って、そう簡単には取り組めない。課題の定義が難しいし、その解決には、世界の英知結集が必要なのである。

4　“Dialogue for Global Innovation”プロジェクト

筆者は、最近、世界の英知を結集して、課題に挑戦する場の必要性を強く意識し、このような場を設けることを提案し、具体的にそのような場の設定を準備してきた。この場で、21 世紀に日本および世界が遭遇する課題を整理し、明確にするのである。そして、これらの課題に対して、1 つ 1 つ、その解決策を提案するのである。この中には、当然、「グリーン・エネルギー」、「ヘルスケア」、「環境」、「少子高齢化」、「イノベーションとアントレプレナーシップ」、「超ユビキタス社会」、「産学連携」、「教育」等々の問題が入ってくる。

ただ、初めから、これらの問題に取り組むには、間口が広すぎるのである。それで、初年度としては、「基礎・基盤技術とイノベーション」に焦点を当てた。具体的には、下記のテーマである。

(1) Trends of innovation study in each country
(2) How innovation research adopted in the nation's policy
(3) Research trend of economic and social impact of Fundamental Research
(4) Best practice of maximizing the economic and social impact of Fundamental Research

これらを、”Dialogue”プロジェクトが主催するシンポジューム（2011 年 12 月 1 日）の共通テーマとしたのである。

先ず、日本からは、約 20 人の産官学を代表するアクティブな人たちのチームを提案した。そして、これらの人達が、グローバルな視点で、問題をとらえ、議論できるように、世界に声をかけた。具体的には、英国、米国、ドイツ、フランス、オーストリア、スイスに声をかけたのである。

そして、2011 年 12 月 1 日、六本木の政策研究大学院大学（GRIPS）で、議論（Dialogue）するのである。日本人 20 名程度、外国人約 10 名程度（実は、これを実現するファンドの資金に限りがあり、外国からの参加者を制限せざるを得ない状況である）からなるシンポジュームで課題を整理し、その解決策を提言するのである。参加者は原則としてポジションペーパーを用意するのである。そして、議論した結果は、直ちに Web などで、世界にメッセージとして発信する。また、後で本にして出版する。本プロジェクトは 5 年である。最初は、なかなか社会も耳を傾けないかも知れないが、根気よく 5 年間続けるうちに、次第に社会に浸透していくであろうという考え方である。

このような、言わば、産官学を横串で、ぐさっと刺すような試みが、日本にとって、とても重要であると思う。ともすれば、タテ割り社会の日本では、産の中、官の中、学の中の自分の持ち場近くに籠りがちである。それでは産官学の協力は不可能である。

5　今後の方向

筆者の観察は決して本筋から離れていないであろうと思う。今の日本に必要なのは、縦型社会を打ち破って、横の連携をしっかりとることである。産は産の持ち場で、官は官の持ち場で、しっかり計画を練らなければならないが、これを持ち寄って、近未来、比較的近い将来の構想を、全体として、すり合わせ、しっかり持たなければならない。この時、ここに付加価値を付けるのが学であると思う。

しかし、これらの連携を、グローバルな視野で行う必要があるのである。そこが、現代のプロジェクトが昔のものと違う点である。即ち、英知に満ちた外国人をここに入れて、世界を舞台として議論するのである。筆者が立ち上げている”Dialogue for Global Innovation”プロジェクトは、まさに、このような考えに立っている。

6　参考文献

6.1　桑原　裕、丸山瑛一　責任編集「技術経営・歴史の検証」、
2007 年 11 月　丸善書店
6.2　桑原　裕、弘岡正明責任編集「21 世紀の展望と技術経営」、
2009 年 7 月、丸善書店
6.3　Yutaka Kuwahara, “Outline of Dialogue for Global Innovation”,
July 2011
6.4　Koichi Sumikura, “Program of Symposium on Dialogue for Global
Innovation ”, July 2011
6.5　桑原　裕：「暗黙知ネットワークの広がりに関する提言」、2011 年研究技術計画
学会年次大会